

「未来の学校づくりに関する調査研究報告書」の概要について

1. 調査研究の目的・概要

(1) 調査研究の目的

「未来の学校づくり研究会」は、様々な分野や立場の方々の参画を得て、より効果的・創造的である学びの場の仕組みを考え、子どもたちの支援を行い得る未来の学校を自由に構想することを目的とした。

欧州の公的機関では、多様な専門家やステークホルダーを集め、対話と協調から未来の価値を生み出す場（＝フューチャーセンター（future center））を創出する取組が広がりを見せている。当研究会は、このフューチャーセンターに類したものであり、教育のイノベーションのための知恵を結集する創造的思考の社会的装置として、また、これからの新しい研究スタイルを導入していく足がかりとして、知的創造の場となることを意図して実施された。

(2) 調査研究の概要

調査研究は、次のⅠからⅣの手法を用いて実施した。

【研究期間：平成23～24年度、研究代表者：工藤文三（初等中等教育研究部長）】

Ⅰ. ヒアリング調査（4名）

- ・ビジネス・ブレイクスルー（BBT）大学院大学学長 大前研一氏
- ・劇作家・演出家 平田オリザ氏
- ・東洋大学理工学部教授・シーラカンズK&H代表 工藤和美氏
- ・明治学院大学学長 大西晴樹氏

Ⅱ. フィールド調査（7か所）

- ①大田区立矢口小学校、②特定非営利活動法人シブヤ大学、③公益財団法人連合生活開発研究所、④ケイ・インターナショナルスクール東京、⑤ふじようちえん、⑥国立科学博物館、⑦明治学院大学

Ⅲ. 委員による現状の課題分析と未来の学校へのアイデア提出

- ・研究会を16回開催して討議（うち2回はヒアリング調査のみ）

Ⅳ. 外国比較調査（韓国）

文化的類似性のある韓国を選択し、委員の専門性に応じ、下記の観点からそれぞれが調査を実施。

- 韓国の不登校・発達障害児に関わる社会教育施設の調査
- 韓国における才能教育に関する調査
- 韓国の教育政策研究に関する最新の研究動向についての調査
- 学校と地域社会との連携に関する比較調査

2. 研究成果の概要

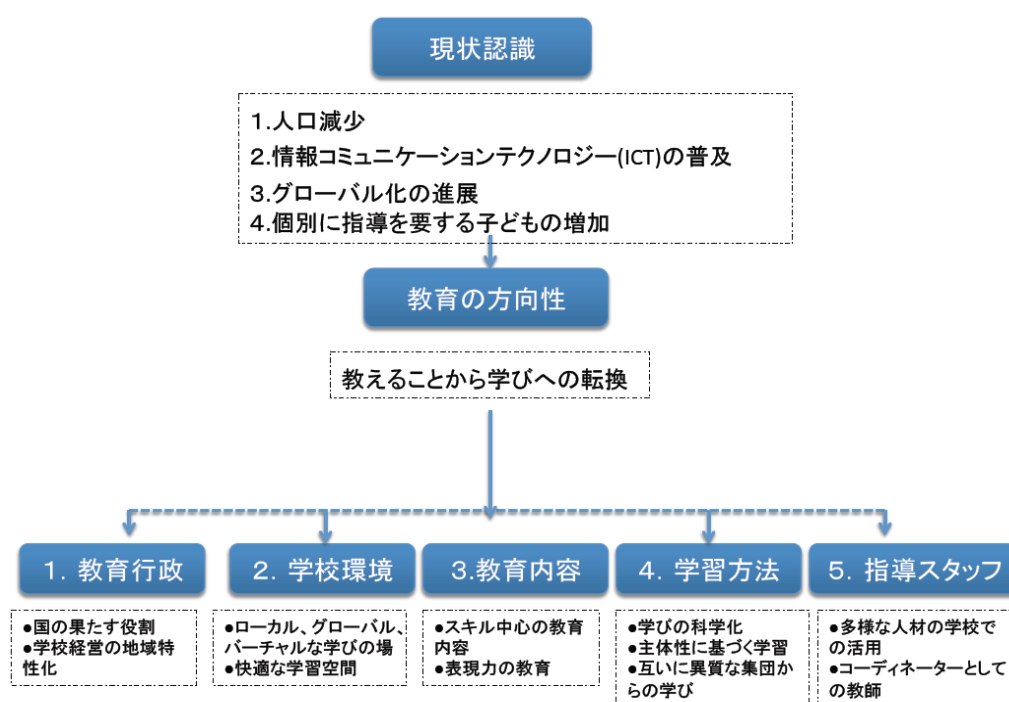
※報告書の目次は別添のとおり。

本研究で議論した「未来の学校」とは、機能概念としての学びのネットワークであり、学びの経験の集積、かつ総体である。

未来の学校では、「教育」から「学び」へと発想が転換されることで、学びのためのスキルの育成が重視される。このため、未来の学校では、現実社会を反映し得る、多様な学習の場、多様なインストラクション、多様なスタッフが必要となると考えられることから、物理的に存在する「学校」の機能は、教育プログラムの提供と子どもの学びのコーディネートであると規定した。

その上で、研究会では未来の学校について委員同士で対話を重ね、図1のように意見を集約した。

図1 未来の学校についての意見体系



以下では、図1で示した5つの観点のうち、2つの大きな論点

○学びのマネジメント（「1. 教育行政」関連）

○学びのデザイン（「4. 学習方法」及び「5. 指導スタッフ」関連）

についての考え方を紹介する。

（1）子どもと身近に接する地域による子どもの学びのマネジメント

① 未来の学校では、既存の学校という枠組みを超えて、様々な学びの中核として、学校が柔軟に学びを組織する機能を持つ。

② 学びの場は、これまでの学校教育で見られたように一律に規定されるのではなく、子どもの置かれた地域特性や状況に応じ、コミュニティデザインの一つとして「学校」を取り込んで考えられる。

③ 学びの場は、状況に応じて柔軟に変化する組織で社会とつながり、いくつかの学校リソースを共有する。(子どもの少ない地域では、複数の学校をコンソーシアムとして組織化し教員を共有)

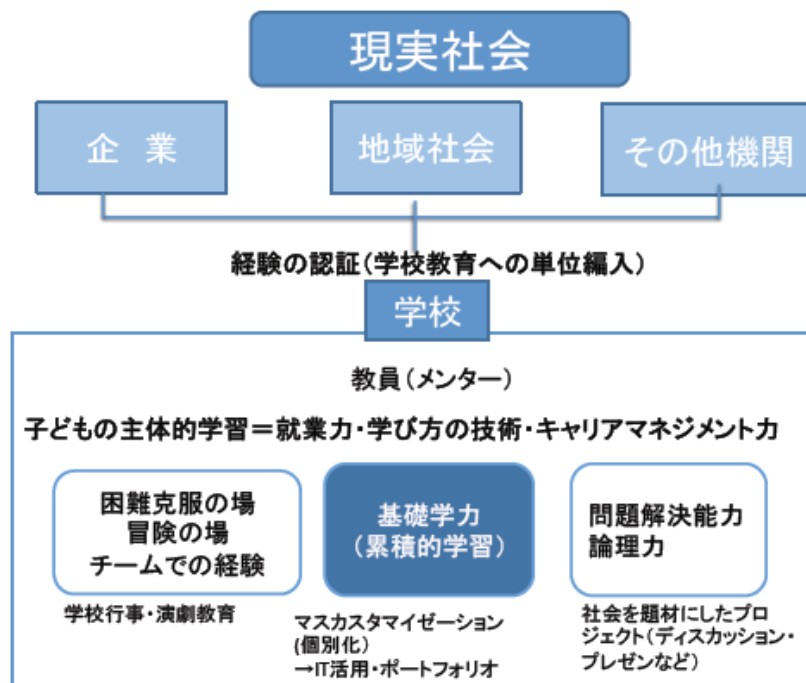
〈例1〉学校以外に多くの人材や学びのリソースが多様であり活用し得る環境の場合

地域の人材、企業、公的施設などを学校の必要に応じてリソースとして取り込めるアメンバー状の柔軟な組織モデルが想定される。そのコーディネートは、地域の自治的グループやNPOなどの学校外の地域運営組織もあり得る。

〈例2〉学校の教員のみが地域の主たる人材と考えられる地域の場合

学校がイニシアチブをとり、地域のセンターとして全面的にリソースを提供し、学校が中心となって地域を含めてコーディネートしマネジメントすることも考えられる。

図2 未来の学校のイメージ



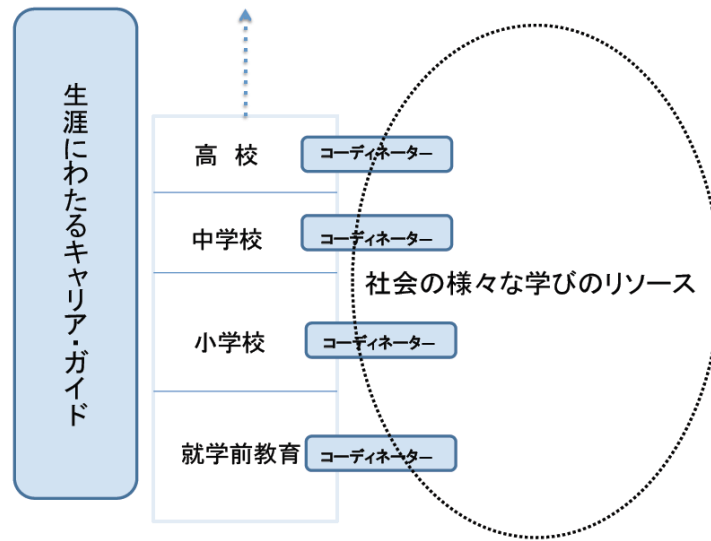
(2) 人生設計としての生涯にわたる学びのデザイン

① 学びをサポートする担い手は、学校教育に限定されるものではなく、縦断的に子どもの学びをサポートする者(垂直軸の支援:注1)と、横断的に子どもの学びをサポートする者(水平軸の支援:注2)により、コーディネートされる。

(注1) 発達年齢に応じて縦断的に学びをサポートする者:就学前から、個々の子どもの発達に応じ、その発達を
保証するキャリア・ガイドであり、学習をコーディネートし、学習や体験の成果を認証する役割を担う。

(注2) 横断的に学びをサポートする者:年齢や学校種に応じて、機能別に設定し得る。たとえば、情緒的な発達
を支援する者、主体的な自己向上を図る態度を育成する学習方法や技術を担う者、コミュニケーション能力を
育成し他者との相互作用の機会を保証する者、組織的マネジメントといった学ぶ場を設定する者、人生設計の
ためにキャリアについてのアドバイスを行う者、などが想定される。

図3 学びのサポーターのイメージ



② 学びに焦点をあてることは、学習活動の総体、およびそれを構成する様々な学習形態（注）、学習の場、学習の内容を考え、その適切なものを演繹的に提示することである。

（注）子どもの学びを中心とした学習形態を考えれば、学校内外の体験に基づく学習、教員などの指導者による個別指導、子ども主体の学習（プレゼンテーション、ワークショップ、ディスカッション）、友人同士の教え合いや学び合い、独習など多様に想定でき、従来の学校教育で行われている教室等における集団での体系的指導は、その一つとして相対化される。

③ 多様な学習形態に呼応して、多様な学習の場や多様な指導方法が導かれ、結果として、適切な学びを可能にする環境を保証し、その整備手段がもたらされる。

はじめに

第Ⅰ章 未来の学校のアウトライン

第1節	研究会の趣旨	1
第2節	現状認識	3
第3節	教育の方向性	7
第4節	未来の学校を展望する五つの観点	9
第5節	まとめ	16

第Ⅱ章 新しい学びを求めて

第1節	学習プロセスの可視化と実験的実践による学びの未来づくり	三宅なほみ	19
第2節	一人一人の才能を伸ばす	中島 徹	27
第3節	国際バカロレアプログラムで国際人をつくる	小牧孝子	35
第4節	学校の現場からの未来の学校	八木佳子	42
第5節	新しい教育課程の編成と基準	工藤文三	48
第6節	学校建築から見た未来	新保幸一	55
第7節	新しいコンセプトによる学校建築の実践	工藤和美	64

第Ⅲ章 社会とつながる

第1節	地域が学校、地域が学習資源	左京泰明	75
第2節	サイエンスを伝えるビジネスからのアプローチ	長谷川和宏	80
第3節	未来に向けた学校 ICT 化の推進	吉田敦也	86
第4節	生涯学習からの義務教育の位置づけ	岩崎久美子	97
第5節	明治学院大学の未来戦略	大西晴樹	105
第6節	未来の学校づくりへの示唆	大前研一	111

第Ⅳ章 生きぬく力をつける

第1節	学力を保証する学校	神代 浩	121
第2節	不登校から教育の原点を考える	藤崎育子	125
第3節	公設民営フリースクールによる課題を抱える子どもへの支援	白井智子	131
第4節	「社会としての学校」の再構築に向けて：「労働」から垣間見た学校の未来	龍井葉二	139
第5節	伝わらないことから	平田オリザ	145

第V章 未来の学校の実現に向けて

- 第1節 「未来の学校の実現」に向けての提案…………… 徳永 保 159
- 第2節 座談会「提案を受けて」…………… 162

第VI章 韓国における教育調査からの知見

- 第1節 韓国教育調査の趣旨と日程…………… 179
- 第2節 韓国の教育事情について…………… 松本麻人 182
- 第3節 韓国教育調査からの知見
 - 3-1 韓国調査からの状況分析…………… 三宅なほみ 195
 - 3-2 韓国における才能教育の体系化…………… 中島 徹 201
 - 3-3 韓国の ICT 状況…………… 吉田敦也 207
 - 3-4 行政委託の NPO による不登校対応…………… 白井智子 222
 - 3-5 ネット中毒への対応…………… 藤崎育子 226
 - 3-6 社会からの孤立・疎外・排除された若者たちの文化芸術を通じた連帯…………… 左京泰明 230
- 第4節 韓国教育開発院：企業と学校の協力体制の発展モデルと事例
(『地域内の企業と学校の協力体制の構築方案』2007年の抄訳)…………… 訳：松本麻人 234

資 料

- 会議日誌…………… 251
- 委員名簿…………… 255

- あとがき…………… 257